

## 【執筆者の紹介】

住所 広島県佐伯郡大野町丸石二一三一七

部隊名は旧満州虎頭第四国境守備隊 第三四七部隊

編成により、新部隊は第二百二十二師団工兵隊（部隊名は忘却）

帰国 昭和二十二年七月二十八日ナホトカ引揚船第一大拓丸にて舞鶴港上陸。

（広島県 山田 浩造）

## シベリア抑留の記

広島県 稲村 香

### 一、経歴

昭和十七年十二月十日、現役兵として第三十九師団（藤部隊）師団通信隊要員で西部第二部隊（広島）に入隊。

十二月十七日夜半、広島東練兵場を出発、下関―釜山―奉天―天津―南京から揚子江を上り、漢口より行軍で中支最前線の湖北省当陽藤部隊師団通信隊に入

隊。

昭和二十年三月襄樊作戦をもって百三十二師団（新輝部隊）と交代、藤部隊は本土防衛軍として濟州島に転進する命を受け五月初旬当陽を出発、八月初め満州奉天に到着したが、時既に遅く、新京防衛軍として満州に留まることになり終戦を迎えた。

### 二、強制連行

終戦後武装解除、四平街市楊木林の元戦車学校に集結、十月初旬「ヤボンスキー東京ダモイ」の言葉に半信半疑、貨車に乗せられ黒河からブラゴエシチュエンスクに渡河、真夜中に汽車に乗せられた。

行き先は定かでないがシベリア鉄道を中継して内地に帰れるのではとの思いも残っていたが、月の光で大河の流れ、月の沈む方向などで判断するに、どうも西方へ進んでいるようで、戦友たちの口数も少なくなつた。

長いシベリアの一夜は一睡もせず、後方の空が白んで、帰れる夢は完全に消え去った。白樺の林が行けども行けども続くシベリアの広野に沈む夕陽、そっと

「お母さん」と呼んでみたこともあった。今思えば無理もない、二十歳で入隊、二十三歳の若年者であった。

輸送車は、何日も同じ所に停車したり、何日も草原を西へ西へと走った。その単調な中で、赤いとんがり屋根の小さな駅の窓際に言い合わせたように置いてある鉢植えの草花は妙に印象的であった。

荒波のうち寄せる大海のようなバイカル湖の南端を通過、イルクーツクに着いて驚いた。戦勝国であるソビエトに、自国のマークのある戦車、飛行機が何百台ともなく山積みされてスクラップを待っている様子であった。

四平街を出発して一カ月余り、ヤブノロイ山脈を越え、オムスクを通過してペトロパブロフスクから分岐し南下し始めた。誰言うともなく中央アジアに連行せられ、生化学兵器の試験台にされるとか全員去勢されるとか囁かれたが、それ程動揺するものでもなかった。分岐して三日目、草原の中に三角の黒い山が見えた。ボタ山である。そこで初めて炭坑に連れて来られたことが解った。

輸送中の食事は不規則で、あらかじめ予定された場所に到着しないと飯にありつけない。真夜中であつたり、二食の日も度々あつた。また、排泄も大休止のときでないと出来ない。そのときは貨車の下にもぐり時間を気にしながらやったものである。

### 三、収容所生活と炭坑作業

万一の病人など想定して出発するとき軍足に入れてきた非常用白米を、最後の会食とするため井戸水で炊飯したが、苦くて食べられない。あとで当番からの伝達で、上水道以外の水は絶対飲んではいけないと注意された。地下水は鉛分が異常に多く、前年ドイツ兵が鉛毒により多数死亡したと聞いた。到着したところはカザフ共和国カラガンダで、第六収容所に収容され、軍隊組織のまま収容所生活が始まった。

通信隊長の和田大尉が中隊長となつて第六炭坑で作業することになった。一〜三組に編成され、朝八時から三交替で昼夜の作業である。三組になると夜中の十二時から朝の八時までであり、この組になるととてもつらい思いをしたものである。組の交替は一カ月毎で、

入坑の一時間前には収容所を出るのでその前に食事をせねばならず、作業中の八時間は飲まず食わずの重労働、ようやく作業を終えて帰ると入浴、その後食事となるので、正味十一時間くらいは何も口にせず働くわけである。しかもその食事たるや、黒パン三百グラムに水のようなスープ粥を少々とする程度。よくこれ体がもてたものと思議でならない。入浴の終わった者から食堂の入口に順番に並ぶ。早く飯にありつこうと入浴もそこそこ、耳たぶの方に石炭の黒こげが残っているのもお構いなし。入口で先ず黒パン一個を貰う。三百グラムずつ計量してあるので量に変わりはない筈なのに形に大小が目立つ。大きく見えるのにみんな注目する。あの大きいのは何番目の者に当たるのか気になったものである。空腹に堪えられず、寝ても覚めても食うことのみ考えていた。まさに人間飢餓の苦しみの教えを体験したものであった。生馬鈴薯を盗んで食べたり、生人参をかじったり、口に入れられるものは何でも食べようとした。生人参は柿を食べるよううで、甘味があり美味しかったことを覚えている。

毎月一回体力検査があり、フンドシも取って臭っ裸になり、軍から来た少佐が前向け、後向けの命令、尻の肉付きを見てアジン（一級）、ドヴァー（二級）、ツリー（三級）と格付けする。女医のいる前で、まるで獣扱いだ。一級は炭坑、二級は地上での作業、三級は収容所内の作業で極めて少数であった。

坑内作業は良質の石炭層を爆破してスコップでコンベヤーにのせるのだが、作業始めから二〜三時間経つと腹がペコペコで力が入らない。足から力が抜けて立っておられず休んでいるとロシア人の監視員が来て殴る。こんな状況をくり返して半年ぐらいたら勤務替えがあり、今度は石炭を運ぶ電車の助手となった。運転手は二十前後の可愛い女の子で、マルトシャといい感じのよい子で、よく話しかけてくる。腹が空いて仕事にならないと愚痴を言うと、翌日パンとバターを持って来て食べろと言った。地獄で仏に会うとはこのことと感謝して、腹巻にして残しておいた絹の布をプレゼントした。それから時々差し入れをしてくれたので炭坑に行くのが少し楽しくもなった。

ある日いつものようにコンベヤーから落ちる「石炭」トロッコに積み、一列車二〇〜三〇両で満車になると次のスメーターに引き継ぐ。引継ぎが終わるとマルーシャに手提ランプで発車の合図をする。電車が発車してアブラキート（終点）近くに来たことは覚えているが……イナムラ、イナムラと呼んでいるマルーシャの声に気がついた。見ると線路の上に寝ている。向かいに手提ランプがころげて光って見える。「スタタコーイ（どうした）」、マルーシャが真剣な顔つきで私を凝視している。感電して失神、トロッコから振り落とされたのである。そのときの恐怖心は何ものにも例えようがない。猛獣にでも襲われた感じで、誰かに助けを求めたい、何とも言いようのない一瞬であった。マルーシャがアブラキートに連れて行き休ませてくれた。帽子も靴もすべて不導体、どうして感電したのでだろう。坑道の天井が極端に下がっているところが何カ所かある、そこは注意して姿勢を低くしないと危険であるが、慣れると放漫になりそのとき電線に耳たぶが接触したものである。

かれこれ入坑して一年近くなつたある日、トロッコを連結していたら急に後ろから他の車が暴走、あつと言う間に追突、右手首を骨折、見る見るうちに腫れて痛みに耐えられない。マルーシャが心配して監督に連絡してくれ、ひとまず事務室の医務係に診察してもらったら、脱臼との診断であった。収容所に帰って医務室の岡本軍医さんに診察してもらったが、レントゲンで見ないととはつきりしたことは言えない、当分休んで経過を見ようと練兵休一週間をもらった。入所以来はじめての連休、何だか他の戦友に悪い気がしてならなかった。一週間経って再診を受けたが、腫れが取れないので町の診療所でレントゲンの検査をすることになり、早速車でロシア人の看護婦に連れられて町に出た。久しぶりに自由な空気を胸一杯吸い、目一杯自然を眺める機会を与えられた。

二、三日経ってレントゲン写真の結果を知らされた。やはり骨折であった。今でも手首の骨が突出している。その時既に折れたままで治癒に近い状態なので、ねじ戻さないと元の形にならないと言って、ねじって副木

二枚で固定した。そのときの痛さはなんとも言いようがなかった。

それから一カ月の入院許可が出て、入院生活が始まった。

#### 四、診察室勤務

入院した頃はすっかり痛みもなくなり、食事は黒パンから白パンに変わり、スープも肉が入り、比較的自よな生活が続いて勿体ない毎日であった。ちょうどその頃病院の責任者で加野軍医さん、後に岐阜市の医師会長を務められた人物で、収容所長の信頼の厚い人であったが、その人から、退院したら診察室で内科の助手として働かないかとすすめられた。戦時中は通信兵としてモールス通信のことならいざ知らず、衛生兵としての経験は全く持たない者に来るわけがないのでお断りしたが、炭坑で命を堵して働くより診察室で働く方が安全で幸いではないか、よく考えて見ると説得された。必修要件は、一、ロシア文字で氏名が書け、読めること、二、多少の会話が可能であること、三、薬の品目を覚えること等であった。いろいろ考えた。

今後何年この地で抑留生活が続くのか、内地に還るまで生き続けねばならない、それなら安全な仕事場を選ぶべきだと決心して、すすめに応じた。

退院して内科の診察室で白衣をつけ、三瓶軍医の助手として指示を受けた。なかなか慣れないが一生懸命頑張ったお陰で三瓶軍医も可愛がってくれ、よく指導してもらった。

ある日モルヒネ〇・三グラムを三グラムと間違えて与え、患者がフラフラしてとても炭坑に行けないと再診を願い出て練兵休となった。あとで三瓶軍医にひどく叱られたが、それ以外は気に入ったようであった。

暇があれば診察室内外の清掃に精を出した。ある日病院の責任者でロシア陸軍大尉のナチャーニクが「稲村、ハラシヨラポータ」と大そう褒めてくれたことがあった。それ以来、毎月の体力検査で検査官の少佐が一級を宣しても、ナチャーニクが記録表に三級と書き込んで長期間病院内に留めてくれた。

ナチャーニクの子供に四歳になる女兒がいた。可愛い子で、名はカーリーナと言った。母親が毎日診察室に

連れて来るので暇があれば遊び相手になってやった。よくなつて私を離さないようについて来る。ある日母親が私を家に連れて行き、馬鈴薯を牛乳で炊いたものをご馳走してくれた。あの美味しかったことも想い出に残っている。マダムが日本のこと、両親のことなど聞くので、内地を出て五年近くなる、一度でいいから父母兄弟に会ってみたいと話す、マダムは涙を浮かべてカニアシヨノ（肯定語）と理解を示してくれ、今年の秋頃には第二回目のダモーイが実現するかも知れない、その時にはナチャーニクによく話して帰国できるよう頼んでやると言ってくれた。

#### 五、帰途につく

まさかこのことが実現するなど思いもしなかった。九月十六日だったと記憶している。前々日夜ナチャーニクが来て、明後日ダモーイが決定した、身辺の整理をするようにと伝えてくれた。夢ではないかと一度は疑ってみたが、嬉しさより戦友より先に還ることの辛さが心に沁みる思いであった。想えば昭和十七年十二月広島を発つて長い五年の間、中支の前線で三年、シ

ベリア抑留二年、心身共に疲れ果て、よくここまで生き永らえた。苦しいとき祖国の両親の顔が臉に浮かび、何度か目頭を押さえたものだった。しかし共に死線を越えてここまで来た戦友を残して、一人内還することが許されてよいものだろうか、後ろ髪を引かれる思いだった。

午後収容所を出て、カラガンダ駅を夕方近くに汽車は発車した。シベリア鉄道東進中、九月の末頃だったが、小雪がちらつきはじめた。チタで重病人が多数下車した。ここまで帰ってさぞ無念だったろう。健康者でもいつ、どこで反動の折紙をつけ下車させられるか知れない。余計なことは一切口に出すことが出来ない。みんな帰る喜びなど表面に出せない沈黙のまま、アクチーブ達の言うまま動くことで、ひたすら故国の土を無事踏むことのみ念じていた。

十月初め頃ナホトカに着いた。ここでは軽労働が続いた。毎日輸送船の入港するのを待ちながら作業の往復に赤旗の歌を唱いながら氣勢を上げた。ここでの民主教育は仕上げの段階で徹底していた。内地を目前に

ここで落とされたらと、みんな真剣にアクチーブの言  
いなりだった。十一月十八日だったか、待ち続けた帰  
還船恵山丸が入港した。いよいよ乗船である。夢のよ  
うだ。一人ずつ名前が呼ばれ、じろっと見つめられた  
ときは身の縮む思いがした、長い時間だった。乗船が  
無事終わり、タラップが上がった。船よ離れよ、早く  
早く離れてくれと祈る思いであった。ついに岸壁を離  
れた。もう降りろと言う者はいない。一瞬我を忘れた  
感であった。二度と故国に還れないのではないかと思っ  
たこともあったのに、今船は夢に見た祖国日本へ向け  
て現実に航行しているのだ。船員から故国の様子を聞  
いた。五年ぶりに日本の御飯をいただいた。涙が出て  
仕方がない。どうしても眠りにつけない。いつまでも  
帰ったときのことを考えていた。

二日目、かすかに鳥影が見えた。みんな歓声をあげ  
た。どの人にも涙が光った。次第に鳥影が濃く、十一  
月の若狭湾の実に美しい山紫水明、国破れて山河あり  
の実感が湧いてくる。手を振って迎えてくれる人が見  
える。ロシア人ではない、懐かしい故国の人々だ、日

本人だ。間違いない、故国日本に帰ったのだ。目がか  
すみ視界が薄くなってきた。みんな涙を流している。  
泣いている。

ナホトカで教えられた「敵前上陸」など思った者が  
いただろうか。私達は日本人だ、日本人として生きね  
ばならない。美しい緑の山々に囲まれた祖国日本のた  
めに、永い永い年月を待ち続けてくれた両親や家族の  
ために、皆心に誓いながらタラップを一步一步降りた。

#### 六、おわりに

あれから五十余年、時は半世紀を過ぎた。想い起こ  
せばシベリアでの生活は飢えと寒さと慣れぬ重労働の  
連続であったが、その中で知り得たことは、国が異なっ  
ても人情に国境なし、言葉が通じ意思が通じれば、お  
互い理解し合える者同士の大きな集団が世界であるこ  
とであった。お陰で喜寿を迎えることが出来て有難い  
限りである。この平和な時代に慣れてあの過酷な過去  
の出来事は想像もし難いが、一生の教訓として無駄に  
なることなく、八十年代、九十年代にも生かしたい。残念  
ながら犠牲となった同年兵の戦友、福山市の井田君、

浜田市の江木君、秋穂町の末貞君の精霊に対し、衷心から御冥福を祈り合掌するものである。

### 【執筆者の紹介】

偶然にも部隊が同じ第三十九師団、略称藤部隊に所属。師団通信隊として、その後師団が昭和二十年五月、中国の黄河西側までの長々夜間行軍による大陸の端から端への行動、旧満州四平街、新京のあたりで対ソ布陣の準備を急ぐところで終戦。抑留拉致されたのが現カザフ共和国カラガンダ、炭坑での生活もまた同様、苦難の中でよく頑張られました。

帰国後、広島県蓮比婆郡庄原地区の地区長としての会の統一推進に活躍。片や、地域の期待要望にこたえられて町議会議員となられたといえます。

私が今年度までに四回の慰霊訪問をさせて頂いたのも、この文中に出てくる炭坑労働の同志で、忘れることのない体験の中で亡くなられた友を訪ねたものであり、スパースクで今年度を最後に二四四体の御霊が政府の力によって全体収集されるその場所だからです。

稲村さんへの感謝と共に、読めばよむ程、苦しいけれど苦しさを喜びにかえ祖国への帰国を無事果たされた稲村さんを心より尊敬し、この稿に感謝を捧げます。

(広島県 山田 浩造)

### 抑留時代の思い出

愛媛県 木屋 隆行

一、終戦から抑留されるまで

昭和二十年八月八日、「直ちに原隊復帰」の命令を受け、南満州地区から派遣されていた十六人は、意味もよくわからないまま帰途についた。が、思うように列車は進まず、結局原隊地には程遠い公主嶺<sup>コウシュウ</sup>で武装解除された。十六人の小人数では行動もできず、そのうち大きな部隊（東北訛りの人が多かった）に吸収され、国境の黒河で三、四日、満州での戦利品の食糧、機材等の運搬を朝から晩まで「ダワイ、ダワイ」の掛け声に追い立てられ、ようやく対岸のブラゴエシチェンス